学生のコンピュータリテラシー向上に伴う外国語授業の新たな展開

—中級ドイツ語のインタアクティヴな授業を例に—

Teaching Strategy for the Interactive Lesson Using the Internet

—As an Example of a German Class for Intermediate Students—

永　井　達　夫

For six years I have taught Intermediate German at several universities using homepages from the Internet as teaching materials. During these six years the Internet spread quickly. The quantity of information sources available on the Internet is increasing day by day, and their quality is improving. I can say with confidence that the average level of computer literacy among present-day students shows a remarkable advance on the past. Now, there is also none of the mental distance between students and the Internet that existed even just a few years ago. In such a situation the Internet can be utilized in drawing learners up to the next level targeted for them. Here I introduce two examples implemented with the present writer's students in 2001-2002: the posting of students results on the Internet and a project in which each students established contact with the webmaster of a German language homepage. Both are based in the interactive aspect of the Internet. In order to teach students who can manipulate a computer comparatively freely, an appropriate new strategy must be devised. In this report I want to offer one suggestion for such a strategy.

はじめに

報告者はこの６年間、複数の大学でインターネットからの教材を使った中級ドイツ語の授業をおこなってきた。そのあいだに２度授業の報告をしているが[1]、その最初のものは、はじめて１年を通してインターネットからのテキストだけを使った1997年度の講義をもとにしている。その当時インターネットは、報告の最初にその解説が必要なほどに、まだ社会に十分認められたものではなかった。学生のインターネットの知識や体験も同じだった。ほとんどの学生は「そういうものがあることは知っているが、自分は使ったことがない」といったレベルだった。インターネットのホームページ（ＨＰ）[2]をそのままテキストにするだけでも、彼らには新鮮なことだった。

その後インターネットは急速に普及し、学生にインターネットの説明をする必要はなくなった。ネット上の情報源は、その量が飛躍的に増え、またその質も格段によくなった。授業

で使うテキストは、「ただ取ってきただけ」では意味がなくなり、さまざまな教授法上の工夫が必要になった。この１、２年で報告者が強く感じているのは、学生のコンピュータリテラシー[3]の平均値が著しく向上したことだ。要因はいくつかある。彼らが小学校や中学校から取り入れられたコンピュータ教育の恩恵を十分に受けた学生たちであること。大学での情報処理関連の講義が実践的な内容に変わったこと。そして携帯電話によるＥメールの交換に象徴されるように、インターネットが彼らの当たり前の生活基盤になったこと。それらの要因が重なり、数年前までは確かに存在していた、学生とインターネットとのあいだの心理的距離がいまではもうなくなった。

そうした状況では、インターネットを使う外国語の授業も、さらに工夫を重ねていかなければならない。今回報告する、インターネットのインタアクティヴ[4]な側面に沿った、外国語（外国文化研究）授業の新しい展開も、そうした工夫のひとつである。具体的には「学生の課題をインターネット上に公開する」「学生にドイツ語のＨＰの作者（ウェブマスター）とコンタクトを取らせる」といった試みをおこなった[5]。学生の収めた成果は、彼らの承諾を得た上で、報告者のＨＰ[6]に載せているので、この報告とあわせて検証願いたい。ともかくコンピュータを比較的自由に操れる学生を相手にするには、教える側にもそれなりの新たな戦略が必要になるはずだ。この報告では、その戦略のための見取り図のひとつを提供したい。

１．改善される教室環境

1.1.　教室によって制限される授業

現在各大学は情報処理分野のための設備投資にことのほか力を入れている。学生が自由に使えるパソコンルームや、情報処理の講義以外にも使用が許されるパソコン教室の数は年ごとに増加している。インターネットを使った外国語授業の教室環境は望むべき方向で前進している。しかしすべての教員が、望むときに望む設備の教室を使えるわけではない。多くの場合、学期の初めに指定された教室を一年間使い続けなければならない。

インターネット教材を使うにしても、CD-ROMなどによる教材[7]を使うにしても、パソコンを使った語学授業の内容は、教室の設備環境に大きく制限される。ビデオモニターのない教室では大人数の学生にＨＰの実例を見せることは不可能だろうし、たとえ学生ひとりに１台のパソコンが用意されている教室でも、それらのパソコンがインターネットに繋がっていないのなら、これから報告するような授業は成り立たない。

どのレベルの授業をするには、どんな設備を持った教室を使わなければならないのか。また自分が使うことになる教室では、どこまでのことができるのか。報告者はこの６年間、様々なレベルの教室でインターネットを使った授業をしてきた。インタアクティヴな授業報告の前提として、そこに行き着くまでのインターネットを使った授業の変遷を、使用してき

た教室や情報処理機器との関連で整理してみる。インターネットを使った授業を初めておこなおうとしている先生方の参考になるよう、少し詳しく述べることにする。

1.2. 従来の教室の限界

6年前報告者が初めてインターネットからの教材を授業で使ったのは、通年使用の中級用のテキストが予定よりかなり早く終わってしまったため、そのあとを埋める教材をインターネットのＨＰから探してきたことが、その理由だった。そのとき使っていた教室はごく普通の語学用の小教室で、いまなら多くの教室に初めから備えられているビデオモニターもなかった。自宅でプリントアウトしてきたテキストを、学生の人数分だけ大学でコピーしたものを配り、その場で分担を決めて訳した。

次の年に、ＨＰからのテキストだけを使うことをシラバスに記した最初の授業を持つことになった[8)]。そのときは古いタイプのＬＬ教室を使ったので、そのままではＨＰの画面を学生に見せることができなかった。報告者は自分のノートパソコンを教室に持ち込み、ハードディスクに取り込んでいたＨＰの画面を見せる工夫をした[9)]。これから訳すテキストが、ＨＰ全体のどこに位置しているのか、またほかにはどんな同じテーマのウェブサイトがあるのかを実際の画面で見せることは、学生のそのテキストに対する関心を高めるためにとても有効なことだ。これ以降ＨＰそのものを学生に見せながら授業を進めることを基本としていく。

次の年にはパソコンの画面を直接ビデオモニターに映すために「ダウンコンバータ」という器械を使うことにした。ハードウエア上の制約で画像が鮮明でないのと、器材の取り付けに時間がかかるのが難点だが、この方法だと、ビデオモニターさえあれば、どんな教室でも実際のＨＰを見せることができる。

自分でハードディスクに落としておいた画像を見せるときの最大の問題点は、「その次のページを見たい」という学生の要望にその場で応えることができないことだ。こちらが予定していた範囲を越えて学生の興味に従っていくことができない。もちろんその場でパソコンがインターネット回線に繋がれていないことが原因だから、報告者が何度か試みたように、パソコンに携帯電話を繋げてリアルタイムにＨＰを見せることも、そのための費用をどうするのかという問題を度外視すれば[10)]可能だ。

報告者は、さらに別の大学の、２つのタイプのいわゆる視聴覚教室・ＬＬ教室を使って授業をしたことがある。視聴覚教室とＬＬ教室とは本来違う目的で使われるのだろうが、「インターネットを利用する授業」から見れば同じものである。１つ目の教室は、学生のブースに12インチほどの小さなモニターが付いていて、そこにビデオ教材を映すことができた。学生が手元でモニターを見ることができる以外に、先に説明したノートパソコンをビデオモニターに映すやり方と何の変わりもない。

もうひとつのＬＬ教室は、学生の机がガラス張りになっていてその下に15インチのモニタ

ーが埋まっている。そこへはビデオ教材だけでなく、教師の机にあるパソコンの画面も映すことができる。ノートパソコンを繋ぐのに比べると画像は格段に綺麗だ。しかもパソコンは学内LAN[11]を通してインターネットに繋がっていた。問題はその当時の（わずか2年前だが）学内LANの回線速度の遅さだった。ひとつのページを表示するのに数分かかるのでは使えなかった。もっともこの教室は、主にビデオ教材を使う目的で1回生の授業の際に使ったので、問題は深刻ではなかった。

以上のように、さまざまな教室で、「インターネットを使った授業」をおこなうことが可能だが、視聴覚教室やＬＬ教室を含めた「従来型の教室」を使うのでは、「従来型の授業」の枠を越えることはできない。「従来型の授業」では学生側からの質問や口頭発表という例外はあるが、授業での情報の流れは「教師から学生へ」が前提となる。たとえインターネットからの教材を使っても、インターネットはここでは教材の供給源にとどまり、それが本質的に持っている「双方向性＝インタアクティヴな面」は生かされない。

そんな折り、2000年度より情報処理教室を使って、ドイツ語・ドイツ文学を専攻する2回生の講義を持つことになった。当初は情報処理教室を使うことによって何が変わるのか、その確かな認識があったわけではなかった。しかし授業を進めるうちに思いもよらないいくつもの利点に気づくことになった。

1.3.　情報処理教室での授業

最初に「情報処理教室」の定義をしておく。学生一人に一台のパソコンが割り当てられていること。パソコンは学内LANなどを経由してインターネットに繋がっていること。この2つが最低条件で、その土台の上にそれぞれの目的によってさまざまな機能が加わっている教室のこととする。

さて講義が始まると教室のハードウエアの貧困さに失望した。パソコンは、その時点ですでに古い型になっていたマッキントッシュで、メモリーも十分搭載されていないため、授業中によくフリーズした。またインターネット回線はきわめて不安定で、土曜日の午後という学内LANが比較的空いている条件にもかかわらず、画像の多いページなどは開かないことがよくあった。一度はリアルタイムでインターネットを使うことをあきらめようと思ったくらいだ。それでも5月の連休が過ぎしばらくすると、回線の状態はなんとか授業で使えるレベルで安定するようになった。

そこでかねてから考えていた、こちらからテーマの大枠だけを与えて、それを授業時間のあいだに提出物という形で出させるという、授業のやり方を試みることにした。1回目は「ドイツ語圏にある動物園のパンフレットを作る」という課題を与えた。あらかじめ調べておいたいくつもの動物園のURL[12]と、どのような提出物を出せばよいのかを説明したＡ４一枚のハンドアウトを学生に配る。彼らはそのURLを頼りにＨＰを開き、比較検討した上でその中か

ら１カ所を選び、その開園時間、料金、所在位置、飼育されている動物、その動物園の特徴などを、これもＡ４一枚の手書きの「人に読ませるパンフレット」に仕上げる。もちろん固有名詞以外は日本語でよい。レイアウトや使用する筆記用具はいっさい制限しない。むしろ学生の工夫を促す。時間内に提出できなかった学生には宿題にさせる。この「その日にやるべき課題を書いたハンドアウトを渡し、授業中は学生の個々の質問に答え、その日のうちにできないときには宿題にさせる」というパターンは、その後この授業の定型となっていく。次の週には同じ方法で、「料理のレシピ」を作らせた。

回線の不安定さは根本的に解決したわけではなかったので、前期の残りの授業は別の課題でおこなった[13]。その時点で、後期から教室内のハードウエアが一新されることを教務からきかされていたので、１時間ごとに課題を与えるやり方は後期から再開するつもりだった。

実際後期になるとハードウエアの問題はすべて解決した。パソコンはウインドウズ2000を基本ソフトにした最新のものになり、メモリーも十分搭載された。LAN回線も理論的にはそれまでの10倍の速さになり、画像を多用したＨＰもストレスなく開くことができた。学生２人に１台のセンターモニタに教師の画面を逐次映すことが可能になった。また複数の学生のモニター画面を教師のモニターで分割表示できるようになった。さらに学生のモニター画面をセンターモニタに映し、学生全員に見せることもできるようになった。この機能は学生が私的にパソコンを使うのを防止する上で絶大な効果がある。

この理想的な教室環境でまず検索サイトの使い方を教えた。教師の側であらかじめいくつかのURLを用意して、その中から課題に使うものを選ばせるのでは、いつまでも自分でＨＰを探すことはできない。数限りなく存在するウェブサイトから必要な情報を見つけるためには、検索サイトを効果的に使わなければならない。そこで「ドイツ語版ヤフー[14]」の使い方を徹底して教えた。その上で、自分の興味ある分野のリンク集を作らせる、ネット上の仮想ショッピング、ドイツの小学校、高校、大学のＨＰ、ドイツへの旅行計画と、学生が興味を持ちそうなテーマで繰り返し課題を与えた。ある時点で手書きから、ワープロでのプリントアウトによる提出に変えた。そのために作業能率が一時的に下がる学生もいたが、しばらくするとワープロ書きの便利さを理解するようになった。

学生たちは大量のドイツ語を前にしてもそれだけで気後れすることがなくなった。必要な情報を得るには、そのテキストのすべての単語を調べる必要はないこと（大量のドイツ語を短時間に処理するので、そのための時間もない）、重要なのはキーワードを素早く探すことなどを覚えていった。毎回テーマは変わるが、作業の流れとしては同じことをしているので、パソコンの操作にも習熟していき、結果として１回の授業で処理できる課題の量が増えていった。自分の実力の範囲で課題を提出できるので、意欲のある学生はいくらでも実力を伸ばせるし、語学力の劣る学生も、課題を仕上げるためには自分の語学力が足りないという現実を知り、それがドイツ語学習の新たな動機付けになった。

2．インタアクティヴな授業とは

2.1.　きっかけ

学生一人一人が情報端末を持ち、それらがどのような規模であれ、教師の端末を含めたLANに繋がっているということは、学生と教師が情報の交換をする上で共通の基盤に立つ可能性を持っていることを意味する。そのことに気づいたのは、学生からの質問メッセージを受けたときだった。各学生のパソコン画面は教師によっていつでも監視できることになっているが、学生の側でもパソコンを使って、教師のモニタ画面にメッセージを貼り付けることができる。たまたまそのとき報告者のパソコンの画面は、学生たちのセンターモニタに映る設定にしてあったので、学生と報告者の質疑応答が学生全員の環視のもとにおこなわれることになった。この方法を使えば、学生が簡単に発表をおこなうことができる。教師は学生に対するコミュニケーションの手段として自分の横に黒板を持っているが、LANで繋がった状態では、学生の側もまた自分のための黒板を持っていることに気づいた。この「黒板」すなわち「LANで繋がった各学生と教師のパソコン」を使って、教室内に限定されるが、学生に課題の発表をさせることができる。

２年目の情報処理教室を使った授業では、最初から理想的な教室環境で授業を進めることができたため、昨年１年間でおこなった課題を10月頃までにほぼ終えた。そこで後期からの新しい課題を考えていたところ、LANの先にはさらにインターネットに繋がっているという「あたりまえの事実」に思い当たった。学生の提出物をネット上に公開すれば、教室という次元を越えて、それこそ世界中の人に成果を見てもらえる。教師と学生とのあいだの課題のやりとりが、学生同士の、そして学生と不特定多数のあいだのやりとりにまで拡大できる。幸い報告者は自分でＨＰを運営しているので、インターネットにファイルを公開する方法については新たに何かを学ぶ必要はない。インターネットの重要な機能のひとつである「双方向性」を生かしたインタアクティヴな授業、情報処理教室をネットの向こう側に移す試み、報告者はその準備にかかった。

2.2.　インタアクティヴな授業の実践報告

2.2.1.　ウェブ上への発表

2.2.1.1.　目的と経過

学生各自のドイツ語やコンピュータの実力にあわせて課題を提出させるやり方では、常にテーマを変えながら学生の興味が続くようにしなければならない。それでもあるところまで来ると「慣れ」が生じ、一部の学生は「手の抜き方」を覚える。インターネット上に学生の提出物を公開するのは、その「慣れ」に対するこちら側からの対策でもあった。12月の最後の週におこなったアンケート[15]の「自分の提出物をウェブ上に公開することをどう思います

か」という項目では、「見られるという意識から緊張感を持ち、真剣に取り組めた」というような答え方をしている学生が多かったことからも、この「慣れ」への対策という目的には適っていたことがわかる。

もう一つの目的は、先に述べたように、学生相互の評価を可能にすることだ。それまでの情報処理教室の機能を使っての課題発表とは違い、自分のパソコンで他の学生の提出物を読むことは、それらを客観的な対象物としてとらえることになる。いわば授業の提出物が、公開された「作品」となって学生の前に並ぶのである。この「作品」という言葉は、学生に向かって報告者が意識的に、授業中何度も使った言葉でもある。

課題が決して難しいものではないことをまず学生に説明しなければならない。具体的にどのような指示をしたのかは、この報告の最後に、10月13日に学生に配ったハンドアウトを資料として載せているので、それを参考にしてほしい。実際ウェブ上にＨＰを公開する上で初心者にとっての壁となるのは、ＨＰそのものを作ること以外のウェブサーバとのファイルのやりとりなどの部分だ。それらはすべて報告者が引き受けているので、学生は「作品」を作ることだけに専念すえばよい。

さらに学生の負担を軽くするために、新たなテーマを設定せずに、いままでの提出物を手直しさせることにした。そのことによってHTML[16] ファイルへの変換のみに集中させることができた。HTMLファイルへの変換といっても何も特別なことはない。学生が新たにしなければならないことは、ワープロのモニター画面を見ながら、レイアウトや配色に気を配り、最後のファイル保存のときに「ウェブデータとして保存する」を選ぶだけだ。

インターネット上に課題を公開するにあたって、画像の著作権の問題は避けて通れない。それまでの課題で学生は、ドイツ語のＨＰに載せられている写真やイラストを効果的に自分の課題に「貼り付ける」すべを覚えている。提出物としてプリントアウトするだけなら問題はないが、それを自分の「作品」としてネット上に発表する場合には、最低限画像の出典は明示しなければならない。また画像は、保存の際に文字情報とは桁違いのファイル容量を使うので、その意味でも画像の使用はできれば控えるように指導した。この課題には４回分の授業時間を配分した。１週目はまず、それまでの課題を保存している各自のフロッピーディスクから今回使うものを選ばせ、ワープロ画面を「ウェブレイアウト」にさせる。背景や文字の色・サイズの変更などHTMLとして必要な装飾のしかたは、報告者が実際にワープロを操作しながら教えた。

この課題は学生の負担よりも、教師側のそれのほうがはるかに大きいかもしれない。学生の課題を載せるためのウェブサーバは教師が探さなければならないからだ。報告者は自分のＨＰを持っているが、学生全員のファイルをそこに置くことは容量的に無理である。１回の分なら可能だろうが、先のことを考えて別のウェブサーバにおいた方がよい。しかし現在では大容量の無料ウェブサーバが複数存在するので、広告が表示されるという問題はあるが、

それを利用するのがよいだろう[17]。また学生の課題を集めるときにそれらをまとめる記憶媒体があると便利だ。今回使用している情報処理教室のパソコンにはＭＯが内蔵されているのでそれを使った。

２週目には各自が選んだテーマと途中経過を発表させた。これもまた情報処理教室の機能を使い、学生各自のパソコンを誰もが見えるようにして進めた。学生自身の工夫で良いものがあれば、みなの手本とするため、そのワープロ操作方法を実際にやってもらった。３週目に、学生一人一人が報告者のところへ自分のフロッピーディスクを持ってきて、それを報告者がＭＯに落としていった[18]。４週目は他の学生の「作品」を読み批評することにすべての授業時間を使った。あらかじめ履修者の名前だけを書いた表を用意し、そこにコメントを手書きで書かせた。

2.2.1.2.　成果と問題点

ここからはできれば注６に記したURLに実際に繋いで、学生の成果を確認しながら読んでいただきたい。全受講者34名中６名が期間内に提出しなかった。内４名は途中から出席をしなくなった学生、２名は事情によりあとからの提出となった。学生が選んだテーマは次の通り。この課題の２週間前の課題だった「興味のあるテーマの自分用のリンク集を作る」が16名。「ドイツの小学校」が３名。「ヴァーチャル・ショッピング」「日本に関するドイツ語のＨＰ」「オクトーバフェスト・レポート」が各２名。「誰かへのプレゼント」「ドイツの大学 vs 関西大学」「料理のレシピを作る」が各１名だった。

どの「作品」も報告者の予想を超える力作揃いだった。特に「興味のあるテーマの自分用のリンク集を作る」では、学生が自分自身で最も関心がある分野を扱うものだけに、それぞれ内容への掘り下げが深く、ドイツ語もよく読んでいることが分かるものが多い。例えばワインに関するリンク集『ドイツの食～ワイン特集～』では、８つのＨＰを丹念に読んだ上で、適切なコメントを書いている。各コメントの分量も適切だ。紹介するＨＰごとに書体を変えているデザインも素晴らしい。同じくリンク集『ドイツの博物館　Die deutschen Museen』は、さらにレイアウトに凝ったもので、写真や背景を工夫して、文章が少ないのを効果的に補っている。皇妃エリザベートについてのリンク集である『Kaiserin　Elisabeth　―美貌の皇妃エリザベート＆ミュージカル“エリザベート”から―』も、対象に対する学生の興味の深さが伝わってくる。グリムのメルヒェンに関するリンク集『MÄRCHENを読もう！～グリム兄弟編～』は、画像をいっさい使っていないが、取り上げているドイツのＨＰがどれもテーマに沿った貴重なもので、専門の研究者でさえ利用できるレベルになっている。

以上例に挙げた「作品」は、学生同士による相互批評でも好評だったものである。それぞれの「作品」に対して１行コメントを書かせたのだが、他人のものに対しては概して公正な批判ができるようだ。また「そのようにして批判的に他の学生のものを見ることで、自分自

身が次に課題をつくるときの参考になる」と、のちのアンケートに書いた者が多かったのも、この種の相互批評の有効性を示している。

普段の課題は１日を１単位としているので、前回を欠席してもその日に困ることはない。しかしこの課題では、途中で欠席した学生には特別な配慮が必要だった。また普段から厳しく言っていたので、その時点ではあまり言わなくなっていたことだが、課題を仕上げる途中で作成中のファイルをフロッピーにバックアップするように、今回もまた忠告すべきだった。ファイルの保存の仕方がいままでと違うので、何人かの学生が誤った操作でファイルの内容を消してしまった。

ファイル名を連番にしてつけさせることも今回は必要なことだった。それまでは各自のフロッピーの中で区別が付けばよいので、日付をファイル名にするのを奨励していた。今回は全員の分を報告者が集めるために、そのやり方だと学生相互の区別がつかなくなるので、学籍番号をファイル名にしたものを使うことにした。

画像等にURLによる出典を付けるのを原則とすることはすでに述べたが、著作権の問題はやはりどうしても曖昧さが残る。ウェブ上のＨＰがさらに別のＨＰとリンクによって繋がっていくのは、インターネットの成り立ちからして当然のことなのだが、中には自分のＨＰが他人に紹介されることを望まない者もいる。授業の教材として利用するだけならばかまわないが、今回のようにさらにウェブ上にそのＨＰの紹介を含む「作品」を公開するなら、できればそのＨＰの作者に承諾を取りたい。特に個人のＨＰを取り上げるときはそれが必要だろう。そこでその承諾の過程をも授業の課題の中に取り込みながら、インタアクティヴな授業の次のテーマに進むことにした。

2.2.2　ドイツのサイトとのやりとり

2.2.2.1.　目的と経過

あるテーマに沿った複数のＨＰを次々に読んでいくいままでのようなやり方ではなく、１つのドイツ語のＨＰを徹底して読みこみ、そのＨＰの全体を日本語で紹介する。その際に自分が日本での最初の紹介者になったつもりで「作品」を仕上げること。この１年間に習ったすべての知識をつぎ込んで「作品」を仕上げること。報告者は学生にそうけしかけた。最初は「ドイツ語圏の個人のＨＰ」に限定するつもりで、そのように学生に予告していたのだが、最終的には資料のハンドアウトにあるように、ドイツ語圏のＨＰならどんなものでもよいことにした。今回の課題は前回と違って、最初からHTMLへの出力を前提にして作らせたのだが、ここでも学生のコンピュータリテラシーの高さをあらためて知らされた。

相手のＨＰを取り上げることの承諾と、日本人へのメッセージの依頼を、Ｅメールで相手に送ることが今回の課題の主眼だった。できればそのためのドイツ語はすべて学生自身に書かせるべきだった。時間的な制約と、初めての試みなので、とにかくことを先に進めようと

いう思いが強かったため、資料に載せたような「いかにも学生が書きそうな」ドイツ語の文を、あらかじめ学生に参考として示すことにした。ところがほとんどの学生がそれをそのまま利用したようだった。

Ｅメールの発信は、学生のプライバシーを守るためにも、学生の個人的なＥメールアドレスからは出さないように注意したい。そのため授業で使っているパソコンから直接発信することを指示した。そうすれば学生の学籍番号がＥメールアドレスになり、相手にはそれ以外の情報が伝わらないからである。

今回はハンドアウトに作業工程が書いてあり、またそのとおりに進んだので、ここでは学生がこの課題をどうとらえたかを、学生へのアンケートの結果に従って指摘することにしよう。ここでもまた学生の成果を私のＨＰで実際に見ていただきたい。

2.2.2.2.　成果と問題点

アンケートでは、この試みを多くの学生が、「ドイツ語を使ったコミュニケーション」「国際交流」「ドイツ語を学ぶ上で、一番リアルでヴィジョンがはっきりしている」「遠く離れたドイツ人とコンタクトを取っているのはすごい」「実際にドイツ人にメールを出す機会はめったにない」「ドイツ語を実際に使うことができると、やる気が出てくる」「すごく緊張するけど、面白かった。世界の人と知り合えるきっかけになるのですごいと思う」「また返ってきたメールを必死に訳し、内容を理解できたときの達成感がたまらなく良かった」と総じて高く評価している。中には「人生で外人にメールを送ることは、きっと、この１回きりになりそうだけど、すごく良かった」との回答もあった。

Ｅメールの返事が返ってきたときの感動が、以上のような学生の反応を引き起こしたのだが、少なからぬ学生がＥメールの返事をもらえなかったこと[19]も書き添えておこう。できればすべての学生がＥメールの交換をできる方法を考える必要がある。アンケートにも「このメールによるやりとりを授業のテーマとしてもっとたくさん取り上げてほしい」というのが複数あった。報告者はＥメール交換を授業のテーマにすることにこれまで躊躇してきた。授業の手順が教師の側で予測できなくなるおそれがあることや、Ｅメールによる個人的なトラブルの発生への危惧などが、Ｅメールを使う課題へのためらいになっていたのだが、今回アンケートで明らかになったように、大きな学習効果があることを考えると、今後は積極的にＥメールを授業に取り入れたい。

Ｅメールを授業で使うには、「文字化け」のことも考慮に入れておかなければいけない。こちらから出すときには、資料のドイツ語文にあるようにウムラウトを使わなかった。また漢字などに使われている全角文字は、たとえアルファベットでも使わないのは当然のことである。一方でドイツからのＥメールの返事では、ウムラウトがすべて文字化けしていた。これは情報処理教室のパソコンに入っているメールソフトの問題なので、今後は対策を講じなけ

ればならない。

2.3. インタアクティヴな授業をおこなうための前提条件

2.3.1. 教室の設備はどの程度必要か

2.3.1.1. ハードウエアの前提条件

インタアクティヴな授業をおこなうための前提条件を考えてみたい。まずは教室の設備だが、今回の報告者の使った情報処理教室は、現在考えられる理想的な教室環境だろう。この１、２年で作られた、またはこれから作られる情報処理教室は、ほぼ同じ機能を持っているだろうから、ハードウエア上の問題はない。もっとも情報処理教室に関しては、まったく同じものはほとんどないと思った方がよい。同じ大学の中でも、建物が違えば、またできた年度が１年でも違えば、教室内のハードウエアも、またソフトウェアの内容も、違っているのがふつうだ。またどんな最新の設備でも４年も経てば旧式になってしまう。この４年という長さは、この先さらに短くなるだろう。インターネット回線の速さも授業の能率に大きく影響する。これも年々改善されてはいるが、学内LAN経由でインターネットに繋がっているのが普通なので、曜日と時間帯によっては支障が出てくることもある。その場合は根本的には授業時間の調整などが必要となるだろう。

学生のパソコン画面を教師のモニターで確認できるのは大いに助かるが、これは必須の条件ではない。教師が授業中に学生のところを頻繁に歩き回ればよいことだ。パソコンそのものは、ウインドウズ・パソコンなら、少し古い機種でもそれほど問題はない。ただメモリーの容量が少ないと、たくさんのブラウザを一度に立ち上げ、かつワープロを使うような場面で、動作が不安定になるかもしれない。マッキントッシュのパソコンは、学生が社会に出てから使うパソコンとの整合性がないことから、できれば避けたい。

課題をその場で提出させるときのプリンターも必要だ。ビデオやDVDなどは、それらを利用することを考えているなら必要だが、たいていの情報処理教室には備えてある。情報処理教室は後部座席の学生まで距離があるので拡声マイクも使えないと困る。

2.3.1.2. ソフトウエアの前提条件

パソコンにはあらかじめＨＰを見るブラウザが付属しているので、そのほかには「ワード」などの多機能ワープロがあれば、インタラクティブな授業をすぐに始めることができる。ブラウザは「インターネット・エクスプローラ（IE)」と「ネットスケープ・ナビゲーター（NN)」の２種類がある。英語以外の外国語と日本語を同時に表示するにはＩＥを使わなければならない[20]。大学のパソコンの設定は理科系の先生の指導でおこなうことが多く、理科系の先生の中には、セキュリティーの観点からＩＥを嫌い、「ネットスケープ・ナビゲーター」を常用する方が多いので、その場合は２種類のブラウザが同じパソコンに混在していることがある。

学生の課題をウェブ上で公開するためには、HTMLファイルを作らなければならないが、そのための専用のソフトを使う必要はない。ワードなどの多機能ワープロには、HTMLファイルへの変換機能が付いているので、それを利用すればよい。

それよりも重要なのは、ウインドウズでドイツ文字を打てるように設定することだ。これは使用者個人のレベルで設定できる場合と、システム管理者以外設定が許されない場合とがある。後者の場合は、学期の始めにしかるべき依頼をしておかないといけない[21]。

2.3.2.　学生のコンピュータリテラシーはどの程度必要か

現在、まったくコンピュータを触ったことのない学生はいないと考えてよい。誰もが少なくとも高校までの授業でパソコンを体験している。ただパソコンに対する好き嫌いは存在するので、コンピュータリテラシーの差はかなりのものがある。それらの学生を同じ教室で同じ時間に教えていくには、課題の出し方に工夫を凝らさなければならない。それぞれの能力に合わせて提出できるようにする必要がある。また最初はどの学生も同じ初心者として扱かい授業を進めていくのがよい。「みなさんの中にはパソコンが得意な人もいるでしょうが、もう一度何も知らない状態に戻って、初めからやってみてください」と、報告者は毎年マウスの使い方から説明することにしている。

これまでの経験から分かったことだが、講義開始時の学生個々の、コンピュータリテラシーの差よりも、自宅に個人用のパソコンを持っているか否かが、その後の各学生の学習成果に大きな影響を与える。学生はパソコンに関することはすぐに覚えるが、自分でパソコンを持ち、日常的にそれに触れていれば、一度覚えた知識や技術をすぐに忘れることもない。

中級ドイツ語の学生のドイツ語力は、インタアクティヴな授業の絶対的な前提条件ではない。今回この報告のモデルになっているのはドイツ語を専攻とする2回生だが、ドイツ語を第2外国語として学ぶ2年次以降の学生でも、あとで述べるような1年を通しての授業計画がしっかりしていれば、インタアクティヴな授業をおこなうことは可能だ。もちろん別の時間にドイツ語の授業があるならその方がよい。例えばドイツ語の授業が週2回あって、その1つでここに取り上げているような情報処理教室を使った授業ができれば理想的だ。

2.3.3.　教師のコンピュータリテラシーはどの程度必要か

インタアクティヴな授業だけでなく、パソコンを使った外国語の授業一般で、学生のコンピュータリテラシーの差は、概して大きな問題にはならない。一方で教師の側のコンピュータリテラシーは、インタアクティヴな授業をする際の最も大きな要素かもしれない。学生のコンピュータリテラシーは年々向上していくのに、教師の側のそれはそれほど向上していないように思える。

例えば学生のパソコンがフリーズするなどの致命的な出来事が授業中に起きることもある。

フロッピーディスクが突然読めなくなることもある。それらに速やかに対処するにはかなりのパソコンに対する知識が必要なのも事実だが、またパソコンをよく知っている学生の助けを借りるなどして、何とかすることができるのも事実だ。しかもハードウエアの進歩によって、そのような「緊急事態」は今後急速になくなっていくはずだ。

教師側のコンピュータリテラシーの問題は、インタアクティヴな授業に限るわけでなく、今後常に取り上げられる問題だろう。個々の教師は、パソコンを初めとする情報機器を授業で使う手段のひとつとして考え、あまりパソコンそのものを大きく考えない方がよい。インタアクティヴな授業なり、やってみたい授業内容が先にあって、そのためにパソコンを使うのだと考えることが正しい順序だろう。

ここでも学生の場合と同じで、重要なのはいまの時点の、コンピュータリテラシーの有無ではなくて、個人で使うパソコンを用意し、常々それに触れていることなのだ。

2.4. 1年を通しての授業戦略

「1.3. 情報処理教室での授業」で述べたことと重複することもあるが、ここでは1年を通しての授業の進め方をより一般化して、どうしたらインタアクティヴな授業へ無理なく入っていけるかを考えたい。

何の準備期間もなくインタアクティヴな授業をおこなうのは無謀だ。すくなくてもその前にインターネットを使った授業の2つの段階を踏まなければならない。最初の段階では、まずＨＰをみるためのパソコンの操作に慣れさせ、一方でドイツ語のＨＰへの抵抗感がなくなるようにするのが目的だ。1回目の授業では、ウェブカメラからのリアルタイムな画像のあるドイツ語圏のＨＰを見せて、その感想を書かせるといったごく簡単な課題から始めるのがよいだろう[22]。この段階では学生が興味を持ちそうな複数のＨＰのURLを教師の側であらかじめ用意しておくことが必要だ。できれば授業時間に仕上げることのできる程度の提出物を作らせるのがよい。そのために独和辞典を持参させる[23]。提出物はどんな形であれ設定した方がよい。これがないと学生は真剣にならない。また提出物は型にはめずに自由に作らせなければならない。学生が持っている表現意欲を、ドイツ語の学習のために利用することだ。期間としては5回分ほどの授業時間を割り振るのがよいだろう。

次の段階では、自分でＨＰを探す方法を教え、提出物をワープロのプリントアウトで提出させるようにする。この2つのことは開始時期をずらすのがよい。「ドイツ語版ヤフー」など、ＨＰを探すためのＨＰである「検索サイト」の使い方を詳しく説明する。「ドイツ語版ヤフー」は、その日本語版[24]とほぼ同じ構成になっていて、検索方法などに大きな違いがない。何度も繰り返すが、この「検索サイト」を効果的に使うことが、インターネットから情報を得るための要になる。

ワープロの使い方に関しては、最初はファイルの保存やプリントアウトの仕方など基本的

なことだけを教え、画像の貼り付け方や、レイアウトの整え方などは、あとから少しずつ覚えさせていくのが効果的だ。ワープロの扱いに慣れてくれば、HTML形式のファイルを作ることは、すでに説明したように難しいことではない。「自分でＨＰを探し、それをワープロによるプリントアウトで提出する」というこの時期の課題は、毎回テーマを変え、それぞれが１日で終えるようにして[25]、10回は連続して続けたい。

以上のような段階を経た上でならば、インターネットを使ったインタアクティヴな授業は無理なく、効果的におこなうことができるはずだ。今年の授業もほぼこの段階を辿っておこなうことができた。この３つの段階の、それぞれの難易度を学生がどう感じたかを知るために、報告者は学生へのアンケートに、「それぞれの時期に、１＝余裕でついていけた、２＝まあ大丈夫だった、３＝何とかついていけた、４＝かなり大変だった、５＝ついていけなかった」と選択肢で回答してもらう項目を入れておいた。23名から回答をえた。最初の段階では、１が０名、２が６名、３が９名、４が７名、５が１名、次の段階では、１が１名、２が４名、３が８名、４が８名、５が２名、インタアクティヴな授業の段階では、１が０名、２が５名、３が４名、４が11名、５が２名だった[26]。このことから各段階が比較的スムーズに繋がっているのが分かる。

３．おわりに

「コミュニケーションのための外国語」と言われ始めたのはいつのことだったろうか。ドイツ語のテキストのタイトルにも、「コミュニケーション」という言葉が多用されている。けれどもそもそも「コミュニケーションでない外国語」などがあり得るのか。外国語だろうが母国語だろうが、言葉はもっぱらコミュニケーションのための手段ではないのか。それならなぜ「コミュニケーションのための外国語」などと言うのだろう。

それは外国語の学習が「言葉」の学習ではなくて、「言葉」に付随するさまざまなものの学習だったからだ。「言葉」から抽象したものを学んでいるに過ぎないのに、「言葉」そのものを相手にしているように思わせる「文法」の学習だったり、その「文法」を理解するためにだけ作られた文章を読む「読本」の学習だったり、意味もなく押しつけられる名作の「解釈」の学習だったからだ。報告者はそれらの学習が無益だと言っているのではない。自分もそれらの学習で英語やドイツ語を学んできたのだし、いまもそれらを学生に教えている。しかし私たちのどこかに、それは本当の「言葉」の学習ではないのでは、という思いがないだろうか。そうした思いがあるからこそ「コミュニケーションのための外国語」などという不思議な表現が出てくるのではないか。

ためしに「コミュニケーションのための……」と名付けられているドイツ語のテキストを開いてみる。挨拶から始まって、簡単な自己紹介、相手の趣味をきく。互いに感情や思考を伝えあう。確かにそこにはコミュニケーションが成立する。そのための場面を教師が学生に

与えるように配慮されている。互いに向かい合った学生は、「言葉」だけでなく、身振りや表情、声の調子によってもコミュニケーションをはかるだろう。「言葉」の学び方としては、特にその最初の学び方としては、良い方法だ。「言葉」を学ぶ基本にコミュニケーションを持ってくることはまちがいではない。

「言葉」を伝える手段として、身振りや表情から始まるコミュニケーションがあるように、「言葉」を速く一度に大量に伝える手段として、さまざまな「文明の利器」がある。インターネットもまたそうした「文明の利器」のひとつだと考えたらよい。ドイツ語勉強する者にはドイツ語圏の、英語を学ぶ者には英語圏の、世界中のすべての「言葉」（ここではそれを「情報」と呼び換えてもよいだろう）を、インターネットは「いまここにある」ものにしてくれる。しかしインターネットはそこにとどまっていない。「言葉」＝「情報」を受ける側が、そのまま「言葉」＝「情報」を与える側にもなりうるのだ。このインターネットの特徴を、報告者は「インタアクティヴ」と言ってきた。「インタアクティヴな外国語の授業」とは、「コミュニケーションのための外国語」のインターネット版と言ってよいだろう。外国語の授業におけるインタアクティヴな試みは、まだその第一歩を踏み出したに過ぎないが、報告者にはそれが語学教育の無限の可能性を秘めたものに思える。

4．資料

4.1.　10月13日のハンドアウト

ドイツ文化基礎研究（第17回ハンドアウト／13. Oktober 2001, Nagai）

きょうのテーマ：　ＨＴＭＬへの展開

きょうからは新しいステージに入っていきます。いままで毎回の提出物はワードのプリントアウトで行っていましたが、今回からは、それがそのままＨＰとして利用できるHTMLファイルで提出してもらいます。と言っても何も難しいことはありません。ワードを使えば驚くほど簡単にできることです。きょうの講義の前半では「ワードを使ったHTMLの作り方」を説明します。

今回の提出物はウェブ上に公開されるので、人に見せて恥ずかしくないものを作ってください。その際に、いままで提出した課題の中から、一番良いと思うものを改良するのがいいでしょう。第16回目の「自分用リンク集」を倍以上に分量を増やすのはどうでしょうか？　それ以外のものでもいいですが、今回は内容とともにデザインも考えてください。もしウェブ上の画像を「拝借」するなら、必ず出典を明示してください。その他必要な注意事項は講義のあいだに言います。

いままでのファイルはフロッピーディスクに入っていますか？　レジュメはクリアファイルにとじていますか？　参考に過去やった主なテーマを書いておきます。

手書きで提出したテーマです
- ドイツ語圏の動物園（第２回）
- 料理のレシピを作る（第３回）
- ビデオとウェブで見るドイツの16の州（第４／５回）

これ以降ワードを使って提出しています
- ビデオとウェブで見るオーストリアの９の州（第７回）
- ドイツ語圏は大作曲家圏？（第８回）
- 日本に関するドイツ語のサイト（第９回）
- 誰かさんへのプレゼントを探す（第10回）
- ドイツの小学校（第11回）
- 関西大学vsドイツの大学（第12回）
- ドイツ語の占いサイト（第13回）
- オクトーバフェスト・レポート（第14回）
- 自分用のリンク集を作る（第15回）
- このポータルサイトが好き（第16回）

ワードでHTMLファイルと作るときのポイント：
- 表示を「ウェブレイアウト」にする。
- 読みやすい配色を考える。画像はあらかじめサイズを小さくしたものを使う。
- １ページの長さは、少し長くてもかまわない。
- 保存するときに「webページとして保存」を選ぶ。
- 最後にブラウザ（Internet Explorer）で動作の確認をする（特にリンクがうまくいくか）。

今回はファイルのまま提出します。プリントアウトは必要ありません。また基準に達していないものは何度でもやり直しをしてもらいます！！

4.2. 11月17日のハンドアウト

ドイツ文化基礎研究（第21回ハンドアウト／17. November 2001, Nagai）

これからの３週間のテーマ：「私が紹介する、とっておきのドイツ語ＨＰ」

作業１（11月17日）：　紹介するＨＰを探し、下の計画書を提出する
作業２（11月24日までの宿題）：　ＨＰのすべての内容を把握する／リンク先も開いてみる（パソコンの利用が困難な学生は、あらかじめＨＰをプリントアウトしておくこと）
作業３（11月24日）：　ウェブマスターにＨＰを紹介することの承諾を取るためドイツ語のメールを送る。またその際に日本人へのメッセージを依頼する。メールの基本的な文案については永井がアドヴァイスする。具体的な提出物の制作にとりかかる。前回と同じようにインターネット上に公開するため、ウェブページとして作る。
作業４（12月１日までの宿題）：　提出物の作成を続ける。タイトル、構成、内容は自分で工夫する。
作業５（12月１日）：　中間発表（１人３分のプレゼンテーション）。疑問点の質問。
作業６（12月８日までの宿題）：　この講義で最も重要な課題といえる今回の提出物を完成させる。
作業７（12月８日）：　提出締め切り日。なおこの日は別の課題をするので、授業時間までに完成させていること。

— 計画書は省略 —

4.3. ウェブマスター宛、Ｅメールの手本

Liebe[r] Herr/Frau Webmaster von >.....<

Guten Tag! Ich heisse ***Tatsuo NAGAI***. Ich bin Japaner/Japanerin und studiere Germanistik an der Kansai Universität in Osaka.

Beim deutschen Unterricht mit dem Internet habe ich Ihre coole Webseite gefunden. Das Thema des Unterrichts heisst diesmal: >>Ich stelle euch eine deutsche Webseite vor, die mir am besten gefaellt.<<

Ich moechte nun auf Japanisch unsere Japaner mit dem Reiz Ihrer Homepage bekannt machen. Wir haben eine Webseite, die wir im Unterricht zur Verfuegung haben, obwohl sie leider nur auf Japanisch geschrieben ist. Darf ich darauf berichten, was fuer eine Web-Site Ihre ist?

Und koentte ich Sie noch darum bitten, uns Japaner kurz zu gruessen, wenn es geht, natuerlich auf Deutsch?

Ich danke Ihnen und freue mich sehr auf Ihre E-Mail!

Tatsuo NAGAI (Kansai Universitaet)

注

1）永井達夫１：「中級ドイツ語授業でのインターネット・ホームページ教材活用の実例と問題点」関西大学『独逸文学』第43号 1999年３月
永井達夫２：「ドイツ語の授業とインターネット」京都ドイツ語学研究会会報 第14号 2000年５月

2）これ以降「ホームページ」はＨＰと表記する。「ウェブサイト」「サイト」は、「ホームページ」を言い換えたものなので、原則として同じものを指す。また「ネット」は「インターネット」と同義であり、「ウェブ」という語が単独で使われたときも、「インターネット」のことを意味する。

3）コンピュータを自分の目的にあわせて利用する能力のことだが、狭義のコンピュータ（パソコン）そのものの習熟度だけではなく、コンピュータに関連するIT技術全般への関与の度合いを意味している。もちろんそこにはインターネットも含まれる。

4）英語の interactiv。「相互に作用する」と訳されるが、activ の持つニュアンスを残したいのと、日本語でも「インタアクティヴ／イントラクティヴ」として日本語に訳さないことが多いので、そのまま使うことにする。

5）本報告の中心となるのは、2001年度関西大学ドイツ文学科「ドイツ文化基礎研究（２年次配当)」でおこった授業である。

6）http://www.doitsugo.com/ の「学生とともに」を参照のこと。

7）同じパソコンを使う語学の授業でも、インターネットを使い外国とのさまざまな距離を縮めるやり方と、CD-ROMなどによって語学の問題演習にパソコンを使うのでは、授業のための準備も、また授業でのパソコンの使い方もまったく異なる。この２つはパソコンを使った語学の授業でもまったく別のものと考えた方がよい。前者を「パソコンを使った情報系の授業」、後者を「パソコンを使った演習系の授業と」呼び分けることを提案したい。演習系なら第２外国語の初学年次にもパソコンを使うことが可能だ。現在報告者はこの演習系のコンピュータを使った語学の授業にも取り組んでいるので、近い将来その報告をしたいと考えている。

8）1997年度龍谷大学、社会学部・理工学部のドイツ語Ⅲ。

9）具体的な方法は、上記「永井１」155ページ以降を参照のこと。

10）教室に学内LANの接続コンセントがある大学もある。報告者は試みたことがないが、それを利用すれば費用の問題は解決する。

11）「local area network」の略語。一建物や、一ブロック内でのコンピュータネットワークのこと。

12）「uniform resource locator」の略語。ＨＰのアドレスにあたる。

13）ハノーファ万博が開催されていたので、ドイツ各州のパビリオンのＨＰをコピーして、学生に渡し発表をさせた。これではパソコンのない教室でおこなっていた授業形式に逆戻りだった。

14）http://de.yahoo.com/

15）大学が一斉におこなうものではなく、報告者が独自に20項目にわたっておこなったもの。出席者23名の回答を得る。

16）「Hypertext Markup Language」の略語。ＨＰはこの言語で書かれている。

17）http://users.goo.ne.jp/ や http://www.tripod.co.jp/ などで提供される無料サービスのウェブサーバが、容量も多く（ともに50Mbyte）使いやすい。

18）学生が提出したファイルの総容量は９Mbyte弱になった。

19）2002年の１月８日の時点でのこと。先方の事情でメールの返事が遅れて来ることもありえる。

20）最新版のＮＮは、英語以外の外国語と日本語が同時に表示できるようである。

21）個人で設定できるときは、〈スタート→設定→コントロールパネル→キーボード→言語〉と進むこ

と。

22）報告者のＨＰの「ライヴ・ライヴ」に、使いやすいウェブカメラのリンク集がある。

23）辞書を持ってこない学生には、次のウェブ上の独和辞典を開くように指示することもできるが、そのことで学生が辞書を持ってこないことを習慣化しないようにさせないといけない。

24）http://www.yahoo.co.jp/

25）実際にはほとんどの学生が宿題にしなければならなかったのは、この課題の問題点のひとつとして残る。

26）数字の合計が23にならないのは、特定の設問のみ回答をしない学生がいたため。